

主体的な学習態度を育む小学校国語科ノートづくりの研究 (2)

原田義則*・原之園翔吾**・辻美咲**・山口奏良**

(2022年11月16日 受理)

Elementary School National Language Study Notebook Instruction that Fosters Proactive Learning (2)

HARADA Yoshinori, HARANOSONO Shogo, TUZI Misaki and YAMAKUTI Sora

要約

本研究は、「令和日本型学校教育」や「指導と評価の一体化」の中で強調された「自己調整学習」を学校現場で進めるために、持続可能な方法としてのノート指導の効果について検証することを目的とする。具体的には、ジーマンらが述べる知見を援用し、「学習動機」「学習方法」「学習時間」「学習結果」の4視点を設定して、鹿児島大学教育学部附属小学校国語部と共同して実践研究を進めた。

対象は、同小学校第2学年、第3学年及び第6学年の子供たちである。分析者である担任は、国語科ノートの記述内容について前期と後期のノートを比較し、その変容について分析した。また、抽出した子供へのインタビューを通して、4視点からの詳細な分析を行った。加えて、分析結果の客観性を確保するために、共同研究者である大学教員が、附属小学校の授業を参観して子供の発言を拾い上げて考察した。

以上の共同研究の結果、学年の発達段階の差異は存在するが、ノート指導を継続して指導することにより、「学習動機」「学習方法」「学習時間」「学習結果」の領域において、児童自ら学習過程を振り返ったり、新しい学習時の「見通し」につなげたりすることができることが分かった。

また、教師へのアンケート調査から、ノート指導を継続して実践してきた教師は、ノートに対する子供の反応が他教師と違ってポジティブな子供の姿を描く傾向があり、教師自身の指導観の高まりがうかがえた。

キーワード：ノート指導、学習調整力、学習動機、学習方法、学習時間、学習結果

* 鹿児島大学法文教育学域教育学系准教授

** 鹿児島大学教育学部附属小学校教諭

1. 研究の背景と目的

中央教育審議会は、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」(令和3年1月26日)において「子供たちの多様化」や「生徒の学習意欲の低下」など7つの課題を挙げている。そして、課題解決に向けては「必要な改革を躊躇なく進めることで、従来の日本型学校教育を発展させ、「令和の日本型学校教育を実現」し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図るべきだとした。なお、「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、次のように整理されている。

- ・ 個別最適な学び・・・「個に応じた指導」(①指導の個別化 ②学習の個性化)を学習者の視点から整理した概念。
- ・ 協働的な学び・・・「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働。一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出す。

中教審答申の提言を、従来からよく見られた「一人一人の子供生徒が主体的・協働的に取り組む国語科学習」に読み替えると分かりやすいが、同答申を読み直すと「『個別最適な学び』が進められるよう、①これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、②子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる」(番号は稿者)という文言に目が留まる。すなわち「①これまで以上に子供の成長やつまずき」と「②子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整すること」が両立する指導が求められているのである。これは、「指導と評価の一体化」(国立教育政策研究所・令和2年3月)の中で強調された、「主体的に学習に取り組む態度」を評価する観点として挙げられた、「自ら学習を調整しようとする態度」と合致する。しかし、同答申が「教師の長時間勤務による疲弊も課題」とするように、学校現場で継続して可能な指導法がなければ、絵に描いた餅になろう。具体的な解決法の一つとして、原田・原之園(2022)⁽¹⁾では、「子供の主体的なノートづくりが主体的な国語科学習をつくる」とした実践的研究を行い、以下の要素が備わった国語科ノートで「振り返り」を行うことが有効であると結論付けた。

- ・ 年間を通して継続すべき「共通性」を備えたノート
(日付、曜日、単元名、学習計画上の何時間目にあたる、学習の振り返り等を書くノート)
- ・ 各単元の特徴を生かした「独自性」を備えたノート
(板書の視写、教材文の貼付け、課題解決のための根拠の整理、自他の考え等を文章や図式化して書くノート)

一方で、学年に関係なく同様の結果を得ることができるか、という点において課題を残した。そこで、本研究は鹿児島大学附属小学校2・3・6年生を対象として、研究を進めることとした。

2 研究の視点

(1) 「学習調整力」の捉え方

国立教育政策研究所教育課程研究センター「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校国語】では、「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、「知識及び技能を習得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうか」という意思的な側面を評価することが重要」とする。その際、「粘り強い取組の中での自らの学習の調整」の両面からの評価が必要としている。

「自己調整学習」の定義については見解が分かれるところであるが、ジーママン（2006・2008・20012・2014）⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾及び三宮（2018）⁽⁶⁾を述べるところを参考にしたい。学習における自己調整を發揮する領域として、「学習動機」、「学習方法・内容」、「学習時間管理」、「学習結果（目的との整合性や評価）」、「学習の物理的・社会的環境の設定や選択」等の領域が挙げられ、「予見」-「遂行/コントロール」-「自己省察」のサイクルによって調整が行われるとする。このサイクルは、学校現場で使用される「見通し」-「言語活動」-「振り返り」に近いものと捉えられる。また、一人一人の自己調整が効果的働くための環境や、共に調整し合う他者の存在も不可欠である。再度ジーママンらの「自己調整学習」に関する知見を援用し、「個別最適な学習と協働的な学習の一体的な充実」を読み解くと、図1・図2のようにまとめられよう。本論文の基底とする。

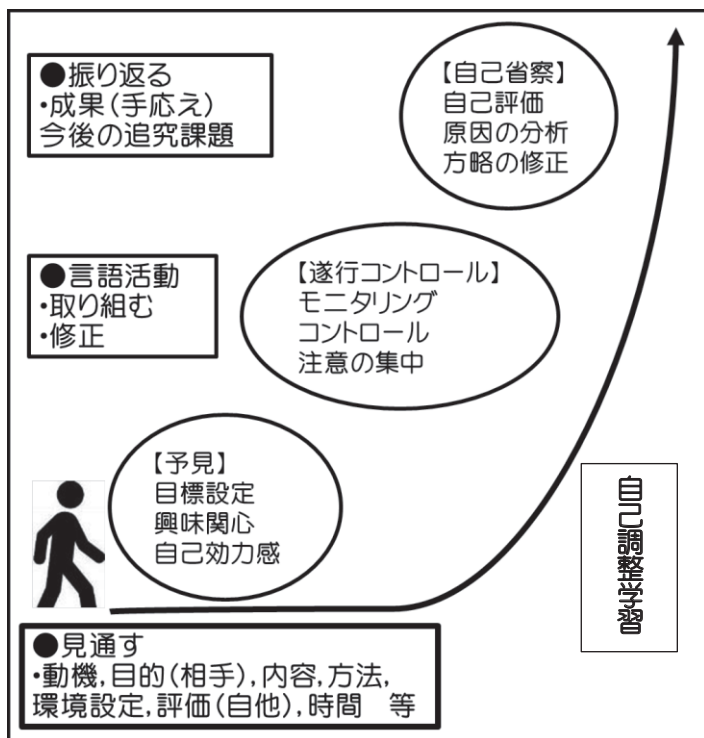


図1 自己調整学習(1990年代～Barry Zimmerma ら)

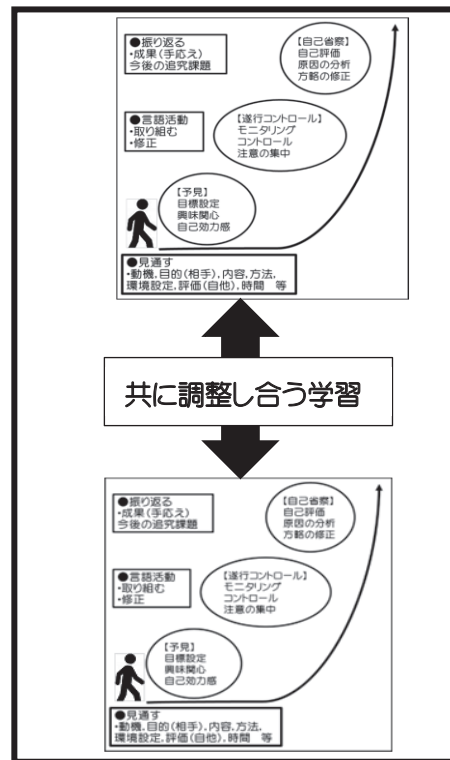


図2 教室内の協働的学習

(2) 令和4年度全国学力・学習状況調査の結果に見る「自己効力感」の停滞

同調査の「小学校国語」の「書くこと」では、今回初めて「共有」過程に関する問題が出された。結果として、「文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること」については、正答率が37.9%と極めて低い結果となった。また、今回から問題冊子に「解答を文章で書く問題」について「どのように解答したか」という設問が付けられたが、「途中であきらめた」「全く書かなかった」という子供の割合は、約20%に上った。また、当該グループに属する子供の正答率は、最大約5割に止まることも報告された。

これらの調査結果等が示すのは、「他者と学習成果を共有し、自分の良さを認識することができない子供たち」、「最後まで粘り強く書き切ることができない子供たち」といった姿である。同調査では、これら2つの課題に対して自己効力感につながる支援を重ねるように示唆している。

では、本論文の冒頭で述べたように、「教師も子供も継続的に何をどのように」取り組めばよいのか。疲弊している学校現場は、新しいことに取り組む余裕は無い。例えば小学校国語科においては、従来から大切にしてきた、ノート指導を大切にしたい。子供たちが、学びの過程を自分の手で粘り強く記録し活用することができるノートは、重要なアイテムである。子供たちは年間を通して綴ってきたノートを、ページ数の多さやノートの重み、幾度も書き加えた意見など、視覚や触覚といった「身体性」を通して認識することで、自己の成長を実感することができる。

なお、本論では「手で書くこと」と「タブレット使用」の効果の差異について検証することを目的としない。しかし、学び手の長期記憶力や熟考、達成感といった領域については、紙媒体への手書きの方が「成績が良い」という報告が散見されることも付しておく。⁽⁷⁾

(3) 従来のノート指導の目的から

ノート指導の目的については、多くの先行研究等があるが、⁽⁸⁾ 本稿では主に日本国語教育学会監修『ノート指導』(2015)⁽⁹⁾ にまとめられたものを参考にする。同書は「ワークシートは、教師が用意した空白に子どもが答えを書き込むもの」が多いため「子供を受け身にしてしまい、自己学習力を奪う」ことがあることに言及する。ただし、「板書の丸写しに留まれば、自己学習力を奪う」ことになり、ノート指導の目的には「自己学習力の育成があること」を見据え「自分の学習の過程や成果を形に残す」というノートの役割を子供に自覚させ、「ノートづくりを自ら積極的に進めるようになるまで様々な手を打ち続けることが大切」だとする。

その条件には、ノートを書くための時間確保も含まれ、具体的には「基礎」「情報整理」「自己の記録」の3側面に留意して以下のような指導をすることが提言されている。

- ①「基礎」 学びを記録する段階（筆写の正確さ、速度、文字の読みやすさ）
- ②「情報整理」 学び見直す段階（階層構造、要約度、検索性）
- ③「自己の記録」 学びを生活に結び付ける段階
（発想の保存、複数の情報の関連付け、自己の学びの省察）

同書が述べるノート指導の目的として「自己学習力の育成」があることに注目したい。前述したように、中教審が求めるのは「子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整すること」であった。ICT教育が進む中でも、ノート指導の意義や方法を再考する必要がある。

一方で、先行研究の中でも、大村（1984）⁽¹⁰⁾のような年間を通して「学習過程や成果を形に残す」という事例は多くない。「主体的な学習態度」「自己学習力」等を育むノート指導とは、先述したジーマンらが述べるように、「学習調整力」－「学習動機」「学習方法・内容」「学習時間」「学習結果（目的との整合性や評価）」「学習の物理的・社会的環境の設定や選択」－の領域において効果的であることが求められる。そのためには、大村（1984）のように長期に渡って粘り強くノート指導を重ねる必要がある。

（4）事前調査から

以上のことをふまえ、本研究の視点を設定する事前調査として、令和3年度に鹿児島大学附属小学校の原之園翔吾教諭に「一年間を振り返ろう～ノート自慢大会～」を実践していただいた。同実践は稿者が以下の内容で依頼し、第3学年国語科学習の最後の授業として展開された。

- ・期日 令和4年3月25日（金）
- ・めあて ノート自慢を通して自分の成長を伝わったろうか。
- ・学習内容 1年間綴ってきたノート記述内容を根拠として、対面もしくはパワーポイントにより自分の成長（できるようになったこと・がんばったこと等）を友達と共有する。
また、その際、1年間で習得してきた学習語彙（知識・技能）を使用して表現する。

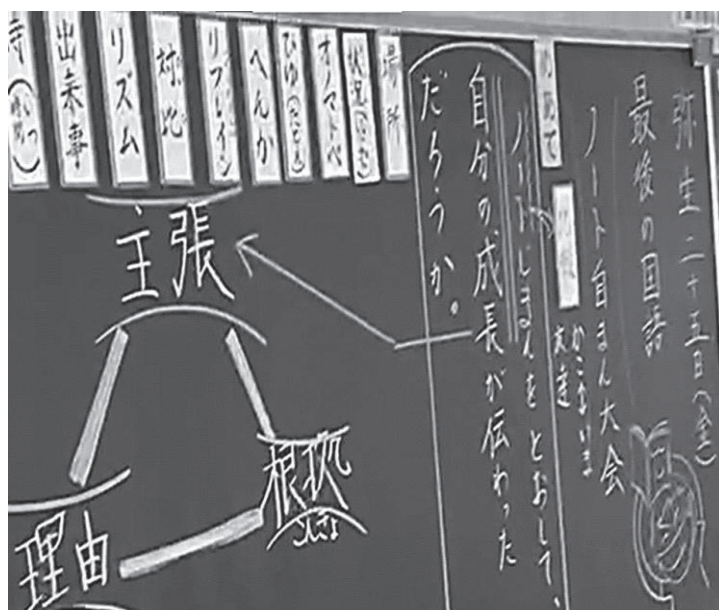


図3 「ノート自まん大会」授業時の板書



図4 積み上げられたノート

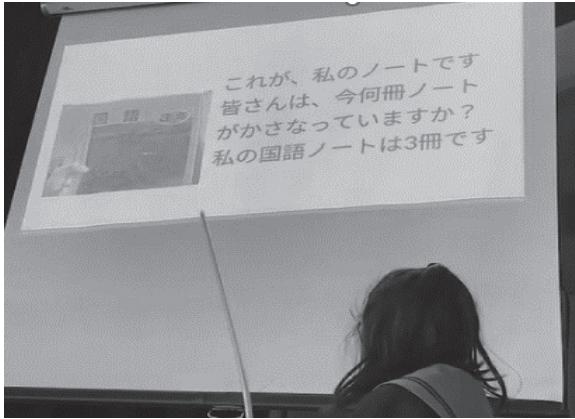


図5 子供Aの発表（パワーポイントを選択）

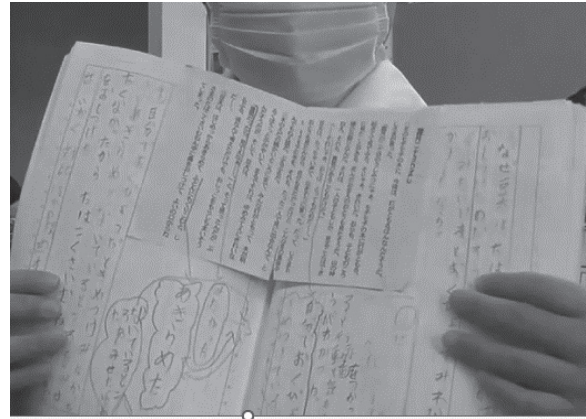


図6 子供Bの発表（対面を選択）

子供Aの発表内容は以下のようなものであった。

子供A：これが私のノートです。皆さんは、今、何冊ノートが重なっていますか？ 私の国語ノートは3冊です。(中略)さて、国語の力は伸びてきたのでしょうか。2年生の時と比べてみましょう。(画面上で2年時のノートと3年時のノート紙面を映し出す)。

教師：2年生の時と！？びっくりした・・・。

子供A：くらべてみてどうですか。今のノート（3年時のノート）の方が、詳しくきれいに書かれていますよね。

他子供：(書かれている！ 絶対そう！)

子供A：このことから、国語の力が伸びていることが分かります。みなさん、私が自慢したいことが分かりましたか。4年生になっても楽しみながら、国語の力を伸ばしていきたいと思えます。

子供Bの発表内容は以下のようなものであった。

子供B：これからノート自慢を始めます。僕が自慢したいのは「モチモチの木」の「霜月二十日のぼん」の場面です。

教師：見せて、見せて。

子供B：特に自慢したいのが「振り返り」です。なぜかというと、「振り返り」をするお陰で、色々な視点から読むことができるようになったからです。根拠は、国語の勉強の「全体」です。(稿者注：計画時間内に課題を自分で解決してきたという意味) 会話・行動・視点に気を付けて読むと、登場人物の状況や心情や気持ち、作者が何を言いたいのが、分かるようになるからです。2年や1年の時と比べてすごくノートをまとめることができるようになりました。4年になってもクラスで一番まとめ方がうまい自分になりたいです。

他子供：(拍手)

本実践は、原田・原之園(1)の研究過程で実践されたものである。したがって、原之園教諭は年間を通して継続したノート指導を実践してきている。子供たちは、1人3冊にまで積み重なった学習ノートの中から、本時の目標「自分の成長を伝えること」を意識して、自分の成長が伝わりやすい方法を選択して内容を決めた。

例えば、子供Aはパワーポイントを選択し、小学2年生時のノートの写真と現在の写真を映し出した。そして「国語の力は伸びてきたのでしょうか。2年生の時と比べてみましょう。」と問いかけ、「今のノートの方が詳しくきれいに書けている」とし、「国語の力が伸びている」と結論付けた。クラス全体からの驚きや称賛の声が沸きあがり、本人は満面の笑顔であった。

子供Bは、ノートをグループ内に提示した。そして記録した学習過程全体を示し、「振り返り」の記述の中で、文学的教材の読み取り方に関する学習語彙を習得できた喜びを語った。そして「4年になってもクラスで一番まとめ方がうまい自分になりたいです」と、次学年への意欲を語り称賛された。

子供たちの発言で注目したいことは、課題解決のために思考した痕跡の自慢、学習計画上の何時間目にあたるといった「時間管理」の重要性に触れた発言、そして次学年における自分への期待である。すなわち国語科学習におけるノート指導が、「学習動機」「学習方法・内容」「学習時間管理」「学習結果（目的との整合性や評価）」の領域において、個別に応じた自己調整学習に有効であることが明らかになった。

(4) 小学校教師の意識から

では、日々国語科授業を行う現場教師のノートに対する意識はどのようなものか。以下の要領でアンケート調査を行った。

- ・令和4年10月22日実施 設問に対する自由記述形式
- ・県内小学校教諭 2年目～34年目 22名回答（回答時間 約20分）
- ・内容（参考：ジーマン『自己調整学習の指導—学習スキルと自己効力感を高める』）

設問1：ノートを取る時に、子供が最も支援を必要とするのは、どんな面か。

設問2：子供に自分のノートの取り方を自己モニタリングさせた時、どのような反応が返ってくると思うか。

設問3：子供に「非常に役に立つノートの取り方」について説明するとしたら、どのような説明をするか。

・考察結果

設問1では、ほぼ全員が「丁寧に素早く自分の考えを書かせること」という回答であった。しかし、具体的手立てを取っているか、という点については1名を除いて書かれておらず、「継続することが難しい」という回答が多かった。

設問2では、子供たちの予想される反応として、「文字を丁寧に書けていないから恥ずかしい」

「書くことがだるい」という回答に加え、「ノートばかりだとこれからの時代に合った力が付けられるのか」という意見もあった。ノートもICTも方法である。国語科学習において、どのように使い分けることが大切なのか、現場教師の悩みが透けて見える気がした。

設問3の回答では、「学習を振り返られる」「自分の成長が分かる」という答えが多かった。設問2において、「ノートばかりだとこれからの時代に合った力が付けられるのか」と意見を付した教員も、ノートの価値について述べていた。

以上の回答から現場教師の傾向として、ノート使用の意義については一定の理解があることがうかがえた。一方で、ノートの有効性について具体的に回答した教員は多くなかった。また、設問2における回答も、子供のノートに対する「負のイメージ」が多く書かれていた。ただし、1名だけ、他とは違う回答内容を提出した教員がいた。これについては、後述する。

(5) 本研究の視点

先行知見等で得られた事実をもとにして、また小学校国語科授業というフィールドであることをふまえ、以下の研究視点を設定した。また、現場教師へのアンケート質問から「ノート指導がもたらす教師自身の変容」という効果があることも分かった。これについては、本論末で紹介する。

表1 研究の視点

	対象領域	本論における具体例
視点1	学習動機	国語科の学習に対する興味・関心が高まったか。
視点2	学習方法	既存の知識を活用し、自分の考えや意見を表現できるようになったか。
視点3	学習時間	前単元の学習よりも、短時間で課題を解決できるようになったか。
視点4	学習結果	理解・表現する言語能力が高まったか。

3 研究の内容

5月時点のノート内容と、10月時点のノート内容を比較し、各学年におけるノート指導の効果について分析することとした。対象は、鹿児島大学附属小学校2年生35名、3年生34名、6年生33名である。分析者は各学級担任にしてもらった。これにより、6か月間で変容した子供の姿を的確に捉えることができると考えた。

3人の担任が分析した結果を先に述べると、ノートの記述量（自分の考え、本文と関連付ける矢印線、振り返りについて記した文章）の増加に加えて、ノート記述の質的変容（学習語彙の使用、読み取りの視点の明記）が認められた。なおノート3学級で共通したノートのフォーマットは、原田・原之園（2021）における指導法（日付・めあて・まとめ・振り返りの記入、教材文貼付・考えの記述・学習語彙の使用等）である。本論文では紙幅の関係上、各学年から1名ずつノートの具体例を取り上げ、分析結果を紹介する。加えて、稿者（原田）が参観した10月の公開授業における子供の発言を引用し、分析結果の妥当性について考察する。

ノートA・Bは、第2学年の同じ子供Pが記したものである。いずれも文学的文章の読解学習における学習内容が記述されている。以下、P児のノート記述の変容について述べ、「学習動機」「学習方法」「学習時間」「学習結果」の4つの観点から分析する。なお、資料として、P児のノート記述に加え、P児自身が自分のノート記述について語ったインタビュー（プロトコル）も用いる。

① P児のノート記述の変容

P児のノートA・Bを比較すると、次のことを指摘することができる。

○「変わっていないところ」

- ・ 教材文の根拠（叙述）に印（線・波線・囲い）を付けている。
- ・ 根拠から線や矢印を引き、気付いたことや考えたことを記述している。

○「変容したところ」

ノートA

ノートB

- ・ 気付いたことや考えたことが → 根拠を基に解釈したことや前の文と比べて根拠の叙述と同じ言葉で書かれていない。 → 分かったことを記述している。
- ・ 気付いたことや考えたことが ↗ 気付いたことや考えたことが増加している。
- ・ 気付いたことや考えたことが ↘ 気付いたことや考えたことのつながりを考列挙されている。 ↘ えようとしている。

まず、「変わっていないところ」を2点指摘する。

「教材文の根拠（叙述）に印（線・波線・囲い）を付ける」「根拠から線や矢印を引き、気付いたことや考えたことを記述する」という学び方は、第2学年の初めの文学的文章教材「ふきのとう」の学習の中で身に付けてきたノート記述の方法であり、今年度の国語科の授業において、継続して実践してきている。この方法は、ノートA・B共に見られることから、P児がこの方法を「よい方法である」と捉え、用いていることが推察される。

次に、「変容したところ」について述べる。ノートA・Bを比較すると、子供自身が気付いたことや考えたことが記録された内容について質の変容が見られる。ノートAは根拠となる文章を示す傍線も長くなっており、教材文下にかかれた4つの囲いの内、2つは教材文の叙述をそのまま引用したものである。一方、ノートBは自己の考えの根拠として引いた傍線も、文章ではなく言葉に注目して引いている。

また、教材文下の囲いの記述を見ると、人物の会話や行動、時間を表した言葉に線が引かれており、子供が吟味して傍線が引けるようになったと考える。子供は、このノートを作成することで、自分がどのように文を解釈したかを振り返り「二人の会話にちゅうもくした」と記述した（変容Ⅰ）。また、ノートAは気付いたことや考えたことが列挙されており、その数も少ないのに対して、ノートBでは記述量も増加し、矢印を用いて関係付けていることが分かる。つまり、自分の思考プロセスを整理して記述していると考えられる（変容Ⅱ）。

② 分析

本項では、なぜ変容Ⅰ・変容Ⅱが見られたのかについて、「学習動機」「学習方法」「学習時間」「学習結果」の4つの観点に基づきながら、考察する。

②-1 変容Ⅰについて

P児に、自身のノートA・Bを示しながらインタビューを行った。以下は、その発話記録の一部を抜粋したものである（発話記録は、令和4年10月7日に行った。P児が話した発話をそのまま記載する。以下同じ。）※「もくもく」→教材文下の考えたことや気付いたことの記述箇所を指す。

教師：ノートA・Bを見て、自分が違うなと感じるのはどこかな。

P児： ①スイミーの時は、どんなふうに線を引いたらいいか迷っていたけれど、今はあまり迷わないで引けるし、もくもくも考えたことをどんどん書けるようになった。

教師：もくもくは、迷わなくなったの。

P児： ②例えば、「親愛」がどういう言葉か考えたり、したことや言ったときどんな気持ちか考えたりしながら書いていくとどんどん書けるよ。

教師：文全部というより、この言葉っていうのに注目して、言葉の意味を考えたり、自分と比べて、どんな気持ちだったか考えたりするとよいですね。

下線部①にあるように、P児は、根拠である叙述や自分の気付いたことや考えたことを迷わず記述できるようになったことを、自身の変容（成長）を捉えている。また、下線部②にあるように、叙述を捉えるとき言葉を吟味して選んでいる様子や、行動や会話、気持ちなど登場人物のことを想像しながら読みを形成することの有用性も感じている。これは、研究の「視点1：学習動機」「視点2：学習方法」に関係する。P児が言葉にこだわって読み進めたり、既知の知識（場面の様子や登場人物の行動・会話・気持ちに着目すること）を活用したりすることが、文学的文章を読解し、読みを深めていく学習への興味・関心を高めることに有機的に働いていることが分かる。

②-2 変容Ⅱについて

教師：もくもくがたくさん書けるようになったのは、なぜ。

P児： ③たくさん気づけるようになって、たくさん書けるようになったし、みんなが言ったことで自分とつながられるのは、全部書けたから。

教師：なるほどね。友達とつながったんだ。この矢印は、どういう意味。

P児： ④それは、手紙を聞いて親友って分かって、だから四日も待てたと思ったから、つなげたんだよ。だって、親友じゃなかったら、しあわせな気持ちでずっとまってるれないと思うし…。

教師：なるほどね。そんなふう自分の考えが繋がったのね。

P児の下線部③の発言から、授業の中で自分の考えをより早くまとめたり、他者の考えも取り入れたりすることができるようになったと感じていることが分かる。これは、研究の「視点1：学習時間」に関係する。また、下線部④からは、子供が課題を解決するために考えをつなげ整理しながらノートをまとめたことが分かる。これは、研究の「視点4：学習結果」に関係している。P児は学習課題を意識しながら、ノートにまとめることができたという達成感を感じている。

(2) 3年生の国語ノートの実分析

ノートA：令和4年6月9日（木）、第3学年N児、教材文「まいごのかぎ」

ノートB：令和4年9月29日（木）、第3学年N児、教材文「ちいちゃんのかげおくり」

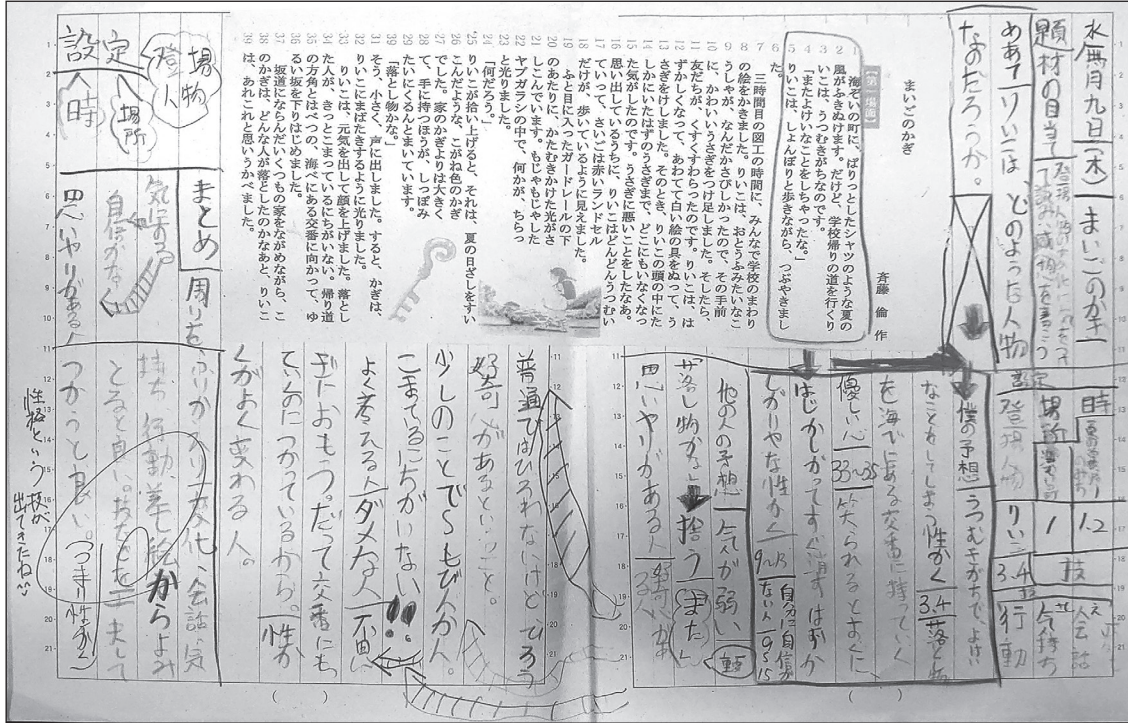


図9 3年生 ノートAの実際

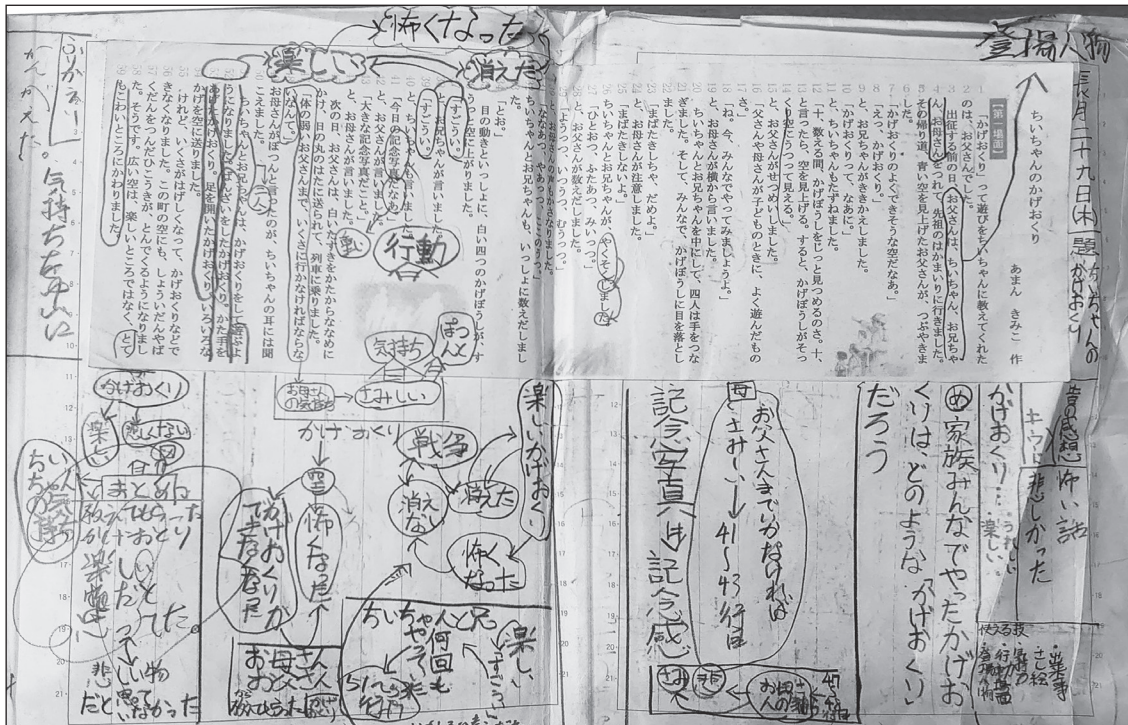


図10 3年生ノートBの実際

ノートA・Bは、第3学年の同じ子供Nが記したものである。いずれも文学的文章の読解学習における学習内容が記述されている。以下、N児のノート記述の変容について述べ、「学習動機」「学習方法」「学習時間」「学習結果」の4つの観点から分析する。なお、資料として、N児のノート記述に加え、N児自身が自分のノート記述について語ったインタビュー（プロトコル）も用いる。

① N児のノート記述の変容

N児のノートA・Bを比較すると、次のことを指摘することができる。




○「変わっていないところ」

- ・ 教材文の根拠（叙述）に印（線・波線・囲い）を付けている。
- ・ 根拠から線や矢印を引き、気付いたことや考えたことを記述している。

○「変容したところ」

ノートA

ノートB

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 教材文の根拠（叙述）にあまり印（線・ 囲い）を付けることができていない。 ・ 気付いたことや考えたことが列挙さ れている。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 教材文の根拠（叙述）に多く印（線・ 囲い）を付けることができています。 ・ 気付いたことや考えたことを線や矢印で関係付け、自分の考えや意見を表現している。 |
|--|---|

まず、「変わっていないところ」を2点指摘する。「教材文の根拠（叙述）に印（線・波線・囲い）を付ける」「根拠から線や矢印を引き、気付いたことや考えたことを記述」という学び方は、第3学年までの国語科の学習の中で身に付けてきた方法であり、今年度の学級においても踏襲している。また、N児は教材文の根拠（叙述）に印を付ける方法以外にも、根拠（叙述）となる文の行番号を記す方法も活用している。いずれの方法も根拠（叙述）を基に自分の考えを形成している方法である。ノートA・B共に見られることから、N児がこのノート記述の方法を「よい方法である」と捉え、用いていることが推察される。

次に、「変容したところ」について述べる。ノートA・Bを比較すると、教材文の根拠（叙述）に付された印の数に注目すると、印の数が増えていることが分かる。たとえばノートAは、教材文の一部のみに印が付けられている。一方、ノートBでは教材文の複数個所に印があり、それらを結ぶことで情報同士を関係付けていることが分かる。子供は、複数の根拠（叙述）に着目し自分の考えを形成しているのである。（変容Ⅰ）。

また、ノートAに書かれた、自分の気づきや考えは単に列挙されている状況であり、それぞれがどのような関係で結び付くのかまでは記されていない。一方、ノートBでは矢印を用いて気付いたことや考えたことを関係付けた上で、自分の考えや意見を表現している。（変容Ⅱ）。

② 分析

本項では、なぜ変容Ⅰ・変容Ⅱが見られたのかについて、「学習動機」「学習方法」「学習時間」「学習結果」の4つの観点に基づきながら、分析を述べる。

②-1 変容Ⅰについて

N児に、自身のノートA・ノートBを示しながらインタビューを行った。以下は、その発話記録の一部を抜粋したものである（発話記録は、令和4年10月7日に行った。N児が話した発話をそのまま記載する。以下同じ。）

教師：(ノートA・Bを比べて) 進化したってところある？

N児： ①なんか、見えるようになってきたから、考えがすぐ分かるようになった。

教師：見える？何が見えるようになったの？

N児：ここがヒントになりそうだなってところが見えてきた感じがする。

教師：すごいね。急に見えてきたの？

N児： ②えっとね。技カード(読みの視点をカードにした物)を見ながら考えると分かってきた。

教師：なるほど。これが(技カードを示す)役に立ったんだね。

N児：そう。

下線部①にあるように、N児は、「読みの視点」を自覚的に捉えることができるようになり、短時間で課題を解決できるようになったと自身の変容(成長)を捉えている。これは、研究の「視点1：学習動機」「視点3：学習時間」に関係する。また、下線部②では、「読みの視点」を活用することで、自分の考えを形成する上で有用であったと述べている。これは、研究の「視点2：学習方法」に関係する。すなわち、N児がノートに記した、既存の知識である「読みの視点」を活用して自分の考えを表現し、国語科学学習に対する興味・関心を高めていると考えられる。

②-2 【変容Ⅱ】について

教師：この(ノートB)矢印って何？

N児：えっとね、連想ゲームみたいにつなげて考えを書いている感じで使ってる。

教師：なるほど。どうしてこんなふうに書いてるの？

N児：線でつなげていくと、いろいろイメージが広がったり、つながったりしてまとめられるから。

教師：なるほどね。自分の考えをまとめるのに便利そうだね。

N児は、学習課題を解決するために、自分の気付いたことや考えたことを放射状に思考を広げ関係付けるのにノート記述が役立ったと述べている。これは、研究の「視点4：学習結果」に関係する。すなわち、N児はノート記述を通して、自己の考えとプロセスを可視化したり、考えと考えをつなげたりしていくことで、自分の考えを形成する方法のよさを実感しているのである。インタビューをしていた私(3年担任)が思わず述べた、「自分の考えをまとめるのに便利そうだね」という発言に、N児は大きく頷いた。

(3) 6年生の国語ノートの分析

ノートA：令和4年5月17日（火）、第6学年M児、教材文「帰り道」

ノートB：令和4年9月30日（金）、10月5日（水）、第6学年M児、教材文「やまなし」

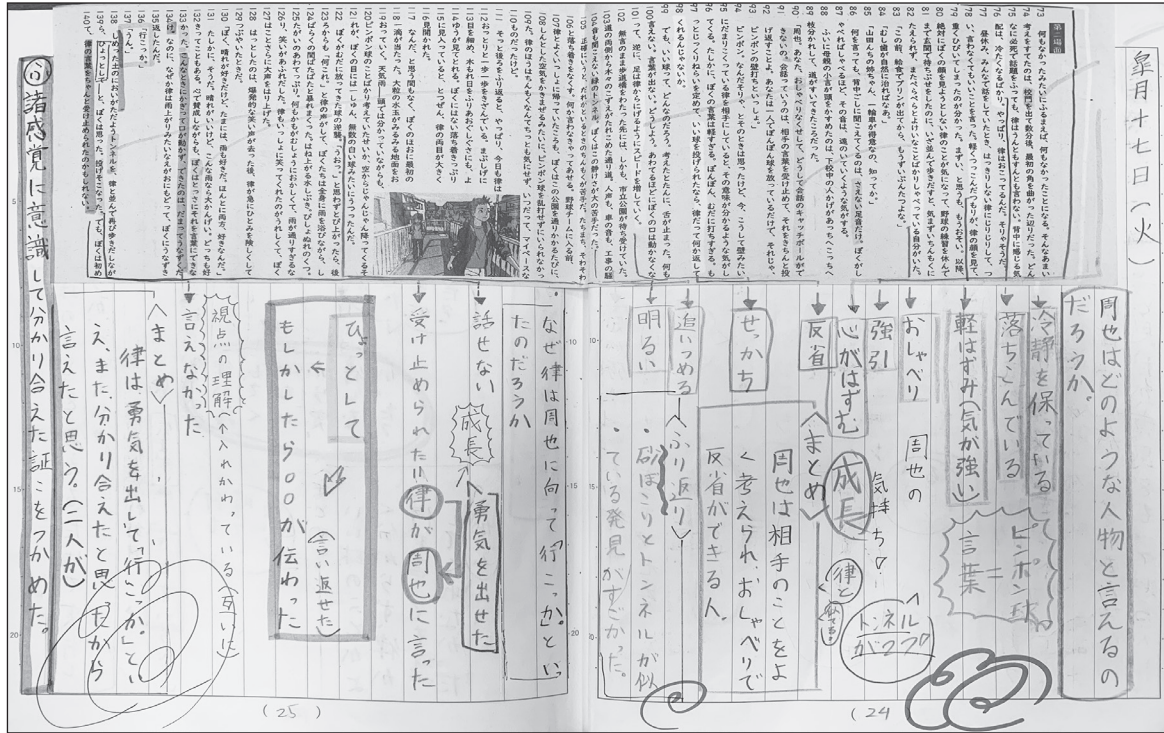


図11 6年生ノートAの実際

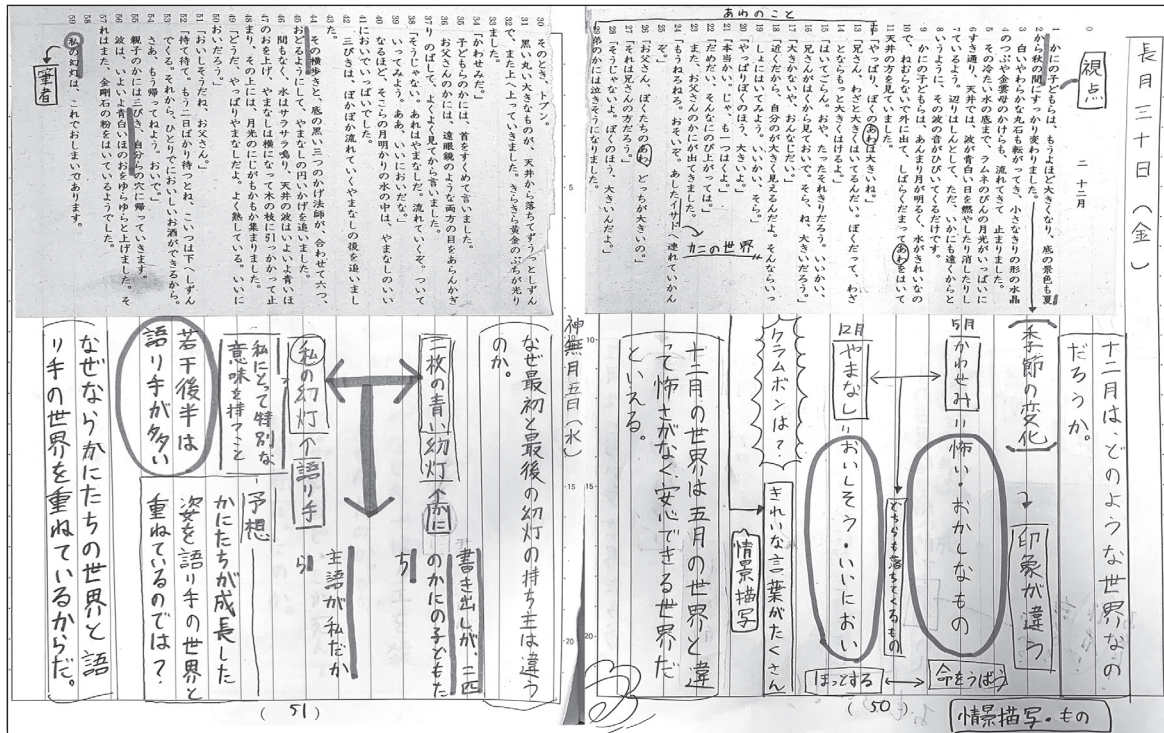


図12 6年生ノートBの実際

ノートA・Bは、第6学年の同じ子供Mが記したものである。いずれも文学的文章の読解学習における学習内容が記述されている。以下、M児のノート記述の変容について述べ、「学習動機」「学習方法」「学習時間」「学習結果」の4つの観点から分析する。なお、資料として、M児のノート記述に加え、M児自身が自分のノート記述について語ったインタビュー（プロトコル）も用いる。

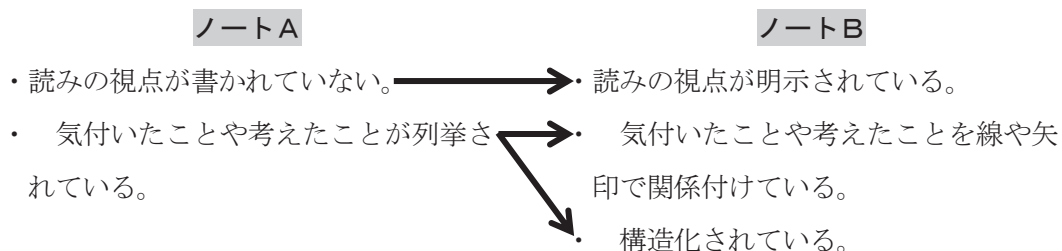
① M児のノート記述の変容

M児のノートA・Bを比較すると、次のことを指摘することができる。

○変わっていないところ

- ・ 教材文の根拠（叙述）に印（線・波線・囲い）を付けている。
- ・ 根拠から線や矢印を引き、気付いたことや考えたことを記述している。

○変容したところ



まず、変わっていないところを2点指摘する。「教材文の根拠（叙述）に印（線・波線・囲い）を付ける」「根拠から線や矢印を引き、気付いたことや考えたことを記述」という学び方は、第6学年までの国語科の学習の中で身に付けてきたノート記述の方法であり、今年度の学級においても踏襲してきている。ノートA・B共に見られることから、M児がこのノート記述の方法を「よい方法である」と捉え、用いていることが推察される。

次に、変容したところについて述べる。

ノートAには、記されていない「読みの視点」が、ノートBには明示されている。「読みの視点」とは、「情景描写」や「語り手」「比喩」など、子供が文学的文章を分析・解釈する際に着目する言葉（叙述）である。また、M児は「行動」や「視点」「心情描写」という「読みの視点」を用いていることが分かるが、ノートAには「行動」「視点」「心情描写」という言葉は明記されていない。一方、ノートBにはその時間にM児が用いた「情景描写」「語り手」等の「読みの視点」の記述がある。

（変容Ⅰ）。

さらに、ノート下半分に書かれた記述を比較すると、明らかな相違点が見えてくる。ノートAでは、気付いたことや考えたことは列挙に止まる。したがって、それぞれがどのような関係で結び付くのか記されていない。一方、ノートBでは矢印を用いて関係付けられている。つまり、自分の思考のプロセスを構造化して記述しているのである。（変容Ⅱ）。

② 分析

本項では、なぜ変容Ⅰ・変容Ⅱが見られたのかについて、「学習動機」「学習方法」「学習時間」「学習結果」の4つの観点に基づきながら、分析を述べる。

②-1 【変容Ⅰ】について

M児に、自身のノートBを示しながらインタビューを行った。以下は、その発話記録の一部を抜粋したものである（発話記録は、令和4年10月6日に行った。M児が話した発話をそのまま記載する。以下同じ。）

教師：（ノートA・Bには）違いがある感じ？

M児： ①視点に着目してやったんですけど、まあ、「帰り道」の時よりかは、だいぶできるようになった。

教師：こっち（ノートB「やまなし」）の方がだいぶ（読み取るのが）難しかったよね？

M児： ②事実（根拠となる言葉）から（線を）引っ張って比べてからまとめだしている
ので、けっこう時間は短縮できてる。

教師：ああ、じゃあ、もう、書く前から見通しがあったわけね。

M児：うん。

下線部①にあるように、M児は、自分自身が用いた「読みの視点」を自覚的に捉えることができるようになったと、自身の変容（成長）を捉えている。また、「読みの視点」を意識的に活用して読みを形成することの有用性を感じている。これは、研究の「視点1：学習動機」「視点2：学習方法」に関係する。ノート記述を通して、M児が既存の知識（読みの視点）を活用し読解することで読みが深まり、文学的文章学習に対する興味・関心を高めることに効果的であったことが分かる。

また、下線部②から、学習活動に対する見通しをもつことで、短時間で課題を解決できたことを振り返っている（研究の「視点3：学習時間」）。

②-2 変容Ⅱについて

教師：他にも、前のノート（ノートA）と比べて、変わったなあってところとかある？

M児：えっと、前（ノートA）のは、線をばあって引いて、そこからまとめていく感じだったんですけど、こっち（ノートB）は、最初、予想を出して…。

教師：なるほどね。どうしてこんなふうにしたの？

M児：なんか分けて、比べることで、世界（やまなしの「5月」と「12月」の世界）の
違いとかが見つけられるし、印象とかも見つけられるから。

教師：そんなふう工夫したわけね。

M児の発言から、本教材が2つの文章から構成されている「額縁構造」で書かれていることや、比較することで印象の違いの原因を探るという学習課題を見通し、学習活動に臨んでいたことが分かる。そして、その見通しに沿って学習をまとめたことが分かる。これは、研究の「視点4：学習結果」に関係する。すなわちM児は、ノートに書かれた「予想（附属小では「直観」）」-「学習課題解決」というプロセスの中で、ノートが効果的に働き、学習内容の更新・焦点化を経て課題解決に至ったと考える。子供Mのノートは、45分の授業を見事にまとめ上げている。

(4) 3年生及び6年生の授業(10月)の導入から

以上の考察は、いずれも「学習動機」「学習方法」「学習時間」「学習結果」という4観点で相互補完しながら、ノート記述が「学習において効果を発揮した」というものであった。

1年間指導を継続してきた担任の分析は重要であるが、さらに子供の変容を確かめるために、令和4年10月22日に公開された、第3学年及び第6学年の授業(導入時)を参観した。

以下は、その際の発言の一部である。

① 第3学年 山口学級における授業の様子(説明的文章単元の第1時を参観)

教師：これまで、どんな説明文を学習してきましたか。

子供：自動車くらべ、海のかくれんぼ・・・(以下、既習教材をすべて想起して発言。)

教師：説明文とは、どのような文章ですか。

子供(ノートを確認しつつ)

子供：えっと、筆者が伝えたい情報や、知って欲しい情報などを選んだり、比較したりして、読んでいる人に伝わるように順序に気を付けたものが説明文だと思います。

教師：ここでは、どんな学習ができそうですか。

子供：発表や記録を取ることに集中したい。

他子供(拍手)

子供：1年生とか2年生は自分の考えだけになるが、でも3年生からは他の人の考えも入れながらまとめができたらいと思います。

他子供(拍手)

② 第6学年 原之園学級における授業の様子(文学的文章単元の第5時を参観)

教師：これまで、みなさんが良く使ってきた方法(板書の語彙カード)はこれですね。では、前時の学習の振り返り(稿者注：本時の導入場面なので、前時の振り返りが本時の見通しとなっている)を、〇〇さん、お願いします。

子供：私は、多面的に考えてきたのですが、今回も多面的に考えていきたいです。特に、「諸感覚」(稿者注：板書にはこの語句はないが、4月に学習したノート内容から引用している)や、「人物の行動」に注目したいと思います。

子供(拍手)



図13 附属小3年 山口学級



図14 附属小6年 原之園学級

下線部に注目したい。いずれも、既習の内容や方法を思い浮かべ、本単元や本時の学習に対する見通しを述べている場面である。従来の学習では、説明的文章に書かれている情報の内容や、文学的文章の事件や舞台、人物への親疎について反応を求める「初発の感想」から導入することが一般的であった。これは、子供たちの興味は引きやすいが、「何を学びどのように生かすか」といった、資質・能力型授業としては不十分である。算数科で三角形という素材だけを学ぶのではないように、国語科でも素材だけ学ぶのではなく、読み取りの方法を積み重ねることが重要である。このような授業を構築するためには、附属小学校の2年生・3年生・6年生が、共通して見せてくれた姿が参考になる。ノートの変容、授業時の発言、年間を通した担任の分析から分かるように、ノート指導を工夫することが子供自ら「学習動機」「学習方法」「学習時間」「学習結果」を有機的に働かせ、自己調整・共調整を行う主体的な学び手として成長していくのである。

4 研究の成果と課題

本研究では、「令和日本型学校教育」や「指導と評価の一体化」の中で強調された、主体的な学習調整を進めるために、学校現場で持続可能な方法としてのノート指導について分析・考察してきた。その結果、ノートの質的変容、担任教師の分析、授業導入場面における子供の発言から、「学習動機」「学習方法」「学習時間」「学習結果」の領域において変容が見られた。

加えて、ノート指導を通して指導者自身の指導観の高まりが見られたことも付加したい。実は、前述したアンケート回答者の中に、附属小6年担任の原之園教諭も含まれていたが、アンケート回答例は他の回答者と全く違っていた。

○設問2：子供に自分のノートの取り方を自己モニタリングさせた時、どのような反応が返ってくると思うか。

回答例

- ・しっかりと根拠を明確にして考えることができたなあ。
- ・自分がどのようにして課題を解決していったかよく分かるなあ。
- ・自分がどんな言葉に注目したのか、どんな読みの技を用いたのか、よく分かるなあ。
- ・考えるのが難しい課題だったけれど、早い時間でまとめられるようになったなあ。
- ・どんどん自分は国語の名人に成長しているぞ。

他の回答者がノート筆記に対する消極的な子供像に対して、原之園教諭は積極的な子供像を述べる。2年間にわたる原之園実践の積み上げが、教師自身の指導観の高まりを促すことが推測された。すなわち、ノート指導を通して、子供も教師も自己調整力が高まる可能性が示唆されたと考えられる。ノート指導が、子供も教師も成長させる。今後、この課題についても調査・分析を行い、研究を進めていく。

5 参考文献

- (1) 原田義則・原之園翔吾「主体的な学習態度を育む小学校国語科ノートづくりの研究」、鹿児島大学教育学部実践研究紀要第31巻、2022.2
- (2) バリー・J. ジーママン、ディル・H. シャンク他『自己調整学習の理論』、北大路書房、2006.9
- (3) バリー・J. ジーママン、ロバート コーバック他『自己調整学習の指導—学習スキルと自己効力感を高める』、北大路書房、2008.9
- (4) 自己調整学習研究会他『自己調整学習：理論と実践の新たな展開へ』、北大路書房、2012.4
- (5) バリー・J. ジーママン、ディル・H. シャンク他編『自己調整学習ハンドブック』、北大路書房、2014.9
- (6) 三宮 真智子『メタ認知で〈学ぶ力〉を高める：認知心理学が解き明かす効果的学習法』、北大路書房、2018.9
- (7) 柳沢 昌義「電子教科書使用時の紙ノートの必要性に関する比較研究」（「日本教育工学会研究報告集」2012.3 など
- (8) ノート例が多く掲載されている先行文献として、本稿では以下4つの文献を参考にした。
 - ・「特集 ノートのマルチ活用・指導していますか」『授業研究 No.362』（明治図書、1990.12）
 - ・「力をつけるノート『赤ペン』の入れ方」『教育科学国語研究 No.613』（明治図書、2001.11）
 - ・『勉強グセと創造力が見につく 秋田県式家庭学習ノート』（主婦の友社編、2009.5）
吉永 幸司（編著）、京都女子大学附属小学校（編集）『考える子どもを育てる 京女式ノート指導術 小学校国語』（小学館、2010.2）
 - ・吉永 幸司（編集、著）、京都女子大学附属小学校（編集）『京女式ノート指導術（2）』（小学館、2011.3）
- (9) 吉永幸司（著）、森邦博（著）、泉宜宏（著）、日本国語教育学会（監修）『ノート指導 —子どもの自己学習力を育てる』（東洋館出版社、2015.10）
- (10) 大村はま著『大村はま国語教室 第12巻 国語学習記録の指導』、筑摩書房、1984